



外来語の問題

高倉 テ ル

— 1 —

近頃 外来語 排斥の 声 が 特 に 高 く な っ た。主 と し て それ が 日 本 神 の 問 題 と 結 び つ い て 称 え ら れ る 場 合 が 多 い が、と ち か く、や だ ら に 余 計 に 外 国 語 お 役 いた が る 管 復 わ、盲 目 的 な 外 国 崇 拝 と 結 び つ い て、決 し て い い 事 で わ な い。だ が、こ の 場 合 注 意 し な け れ ば な ら な い 事 が あ る。と ち か く、外 来 語 が 必 ず 日 本 語 の 中 え は い っ て 来 る か と ち う せ の 原 因 だ。こ れ ま で 外 来 語 お 排 斥 し た 人 た ち が い つ も 盲 目 的 な 外 国 崇 拝 と ち う 点 だ け か ら と ち か 云 っ て い た。し か し 外 来 語 が 使 わ れ る 為 に、盲 目 的 な 外 国 崇 拝 か ら 来 る 場 合 と、そ う で な い 場 合 と、ほ っ と ち 違 い 二 途 有 る。こ れ ま で そ の 区 別 が な さ ば け な かつ た も の だ か ら、外 来 語 お 排 斥 す る 事 が、結 局 逆 に 盲 目 的 な 国 粹 主 義 に 陥 る 場 合 が 非 常 に 多 かつ た。

と 実 例 お 取 っ て 見 よ。

物 組 来 だ の 銅 鑿 漆 だ の と ち う 支 那 人 ち ゃ い 名 前 お わ ざ わ せ 使 っ たり、お 茶 の 水 の 華 お 茗 湯 と 云 っ たり、京 都 に 上 洛 外、洛 内 と 云 っ たり と ち う 言葉 お 使 っ たり す る の が、正 に 下 ら な い 支 那 崇 拝 か ら 来 た も の で、全 く 意 味 の な い 事 だ。し か し、ラ ン プ、ミ ン、セ ン ベ イ、ラ ジ オ、ト ー ち かな ど と ち う 外 来 語 が 日 本 語 に 適 入 っ て 来 た 場 合 が そ れ と ち 違 っ て い る。こ の 二 つ お は っ き り 区 別 す る 事 が 出 来 ず、何 で 外 来 語 なら 排 斥 す る と ち う 態度 お 取 る 所 だ、こ れ ま で の 外 来 語 排 斥 だ、結 局 物 屋 ま じ ら ず、い ち ず け に 無 意 味 な 混 乱 を 生 み 出 す に 過 ぎ な かつ た 原 因 も あ っ た。

— 2 —

日 本 語 の 單 語 が 一 体 と こ ま で が 純 粋 の 日 本 語 で と こ ち か ら が 外 来 語 だ か と ち う 事 が、今 で わ と 一 て い 分 け 不 可 能 だ。馬、ト ー ち かな ど も 元 来 支 那 語 か ら 来 た も の だ が、今 で わ こ れ が 外 来 語 だ と ち う 感 じ わ 誰 も 持 っ て い ない。馬 が 輸 入 せ ら れ た と ち う 事 が

日本の農業が根本的に変えた。日本の社会が将来ありゆる意味で発展する道の基礎がこの時に置かれた。初めて馬が輸入せられた時、それに対する日本語が有る筈がない。そこで、支那語の「馬」がそのまま日本語に入れた。誠に自然の事だ。同じわけで、「ミノ・シヨウ・ユ・センバイ・マンジュー・ヨーカン」その他無数の言葉が朝鮮語や支那語から溢入って来た。

前漢の張騫が13年かかって西域交通の道を開いた。そして、苜蓿と葡萄が持って戻った。殊にこの苜蓿が支那に輸入した事ゆゑ支那農業の大発展の基礎を置いた。その苜蓿が何に日本に輸入せられて、同じく日本で農業が根本的に改革した。ここで、初めて日本の収縮農業が可能になり、殊に二毛作の直接の原因を作った。ところで、「苜蓿」がどの言葉であったか、よく分からない。しかし、少くとも支那語でなかつた。苜蓿の輸入と一緒に支那語に輸入せられた外国語だ。日本語に「馬」がはいって来たのと全く同じ形だ。ところで、その「苜蓿」がそのまま日本語にはいって来なかつた。これに「馬こやし」という新しい日本語が直された。私にここに当時の日本の農民たちの実にすばらしい創意が見出す。そして、心から驚きの目を見る。

言葉を生産点に於て最も大きくその機能を果たす。したがって、そこで最も正しく発展する。この一つの外来語のこなし方にさえも、生産者たちが生産者であるが等々持つ創意とゆうものが実にあざやかに現れている。

— 3 —

ところで、外来語は今一つこれとわ全く違った形ではいって来ている。それの殆ど全部生産点から離れた封建制の支配者たちの手で輸入せられたものだ。例えば、それまでの農民自身の「たねまき・草とり・とり入れ・こやし」などに対して、「播種・採草・収穫・肥料」などがそれだ。これら支那語から輸入せられたものか、又漢字を組み合わせて支那語に似た漢語を作り出したものか、どちらかだが、とにかく日本語でなかつた事だけは同一だ。

これらの漢語が全く生産の必要から生れたものでないとゆう点も特別に重要な考へなければならぬ。「馬」や「馬こやし」が新しい

く日本語に生れた争わすぐに日本の生産そのものが発展する大きな基礎となり、又その重要な証拠お示している。これに反して、これらの漢語を、直接生産地にある人間たちに次して使われなかっただけでなく、信に日本語を分裂させ、^{全く}無意味な混乱お生み出し、日本語の正しい発展お妨げる非常に大きな原因となっている。つまり、生産に何らの発展お持ち来らせなかっただけでなく、逆に生産のための非常に大きな妨げとなっている。

それで、なぜそんな有害な外来語が日本語に輸入せられたか（とゆう）と、それら、封建制の支配者たちが、生産の必要から全く離れて、単なる政治的な必要からこれらの漢語を無理に作り出したからだ。

現在もまだとゆう奇妙な、そして実に有害な漢語が、日本の政治家や文化人たちの手によって無数に作られつつある。少くとも、とゆう漢語がまだ日本語から消えないとゆう争わ、政治家や文化人が必死でそれを守っているからだ。ところが、日本語を守れと云って外来語が日本語にはいつて来るのに、却して極力反対の声おあげているのが、それらの政治家や文化人である争わと云ふべきな現象おわれない。それらの人々、片かなで書くより外に書き方のない言葉おすべて外国語として避け、やはり漢字を組み合わせた奇妙な漢語や又わ日本の古語を以てそれに替えよーとしている。

ここですべての日本人が日本語の問題を正しく認識しなければならぬ必要が痛切に感じられる。ラジオ・ラップ・ミシン・ソース・テキスト・サイレントその他の外来語を今さら純粋の日本語に置きよーといくら努力したって、決してできるものでない。それらこれらの既に成りつはな日本語になっているからだ。これらの生産的な必要から必然的に日本語に輸入せられたものであり、その輸入がすぐに生産的又文化的に、日本の社会を高めている。だから、これこそが、よくば元々外国語であつても、本当の日本語だ。これに新しい別の言葉お置き替えよーとする争わ、だから、それこそ反って日本語に外国語を置きよーとするものなのだ。この場合、昔の或る日本人が使った争わがある（とゆう争わ）と云ふ、決して、それが日本語であるとゆう理由にわならない。例えば、現在多くのローマ字論者たちが、漢語を換（か）ひの余り、しごとくに「しごと」を「しご様なら」に「かしごと」を「宴会」

に「うたひ」おとやうよ一に、現在すべての日本人に使われているき
 様おさえ奇妙な古語に替えよ一としている。ふしはそれが漢語
 漢語であつても、「宴會」が日本語であつて「うたひ」は決して現在
 の日本語ではないと申す事お知らなければならぬ。

こ一考える時、外来語の問題お実に正かに弊次がつく。現在外
 来語お排斥している多くの人たちお、反つて逆に日本語お外来語に
 置き替えよ一としているのだと申す事が分かる。そして、そ一やう
 無意味な混乱から日本語お救う為にお、日本語お日本の生産力お高
 る能力お最も大きく發揮できるよ一、したがつて、それお基礎に
 初めて日本の文化お益しく發展できるよ一、そ一やう立場から日本
 語や日本の文字の問題お考えさえずれば、決して誤らぬ。その観
 点お見失う時のお、あらゆる混乱お生れて来る。

寄付の御礼

お礼を申し上げます。

1 冊一 早稲田ローマ字会

1冊40銭一 小川 尚 義

原稿を募る

締切：7月31日

予約単位の改め

これまで予約は6冊を単位にしておりましたが、これから4冊に改めます。4
 冊とは例えに14号から17号までです。但し増大号はページ数によつて1冊半
 又は2冊と計算されることがあります。

○ 4冊の予約値段 — 1 冊

次号の予告

話し言葉と読み言葉	平	井	昌	夫
国字運動の方策	佐	多		仲
《たび》の生活言語学	黒	滝	成	至
支那のエスペラント運動の歴史	鳥	見		昇
修辭の社会性	祝	秀		依
明治中期児童遊戯語彙	松	川	弘	太
《浮世風呂》と高山方言	住		忠	夫
— そのほか色々 —				